

狐にばかされた話

この話は明治十三、四年ころの実話である。

その頃女神山のふもとに、七という五十才位の人がありました。この人がなにかのことで金が必要になった。それが、この人にはばかにならない大金だったので。そこで七じいさんは、羽田の友達のところへ金策に出かけた、それは日暮れ頃でした。そして羽田の才の内の下まで行ったところで、自分と大体同じ位の年配の男の人に会いました。ところがその人が「これからおめえさん、どこに行くんだ、しんぺい顔して」と声をかけられたので、思案に余っていた時でもあったので七さんは「急に金がなくてなんねえことが出来たので、羽田の友達のところに行ってみべえと思つて出て来たが、友達のところでもどうかと思つてな、しんぺいしているところよ」と答えた。ところがその人はいとも簡単に「なんだい、その位の金か。おれは針道だが、その位の金ならすぐに貸してやるからおれといっしよにやばっしえ。そればかりの金でしんぺいしつことあつか、おれに任せてついでこつせい」といわれた。そこで七さんは、友達のところに行つたつて、果たして貸してくれるかどうかとも心配していたところでもあり、その人の後について行くことにした。川俣の町も通り越してずい分歩いたように思ったが、やがてちらちら火が見えてきた。「あそこがおれの家だ」と指さしながらその人は、ずんずん行く。行つてみると、大きな構えの家で大勢の人がいるようである。そこで主人は「おういおつかあ、今来たぞう。伊達のお客様をおつれしたから、何でもうんとごちそうしてくれや」といった。